（様式５）　　平成２９年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	管 29K04	氏　名	今津　好康
研究主題 ―副主題―	日々の学習指導に役立つ「授業設計シート」の提案 ―社会科を苦手とする教師の授業構成力の向上―		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	向山　行雄
所属校	清瀬市立清瀬第八小学校	校長	佐藤　門太

キーワード：授業設計シート　関連性のある授業　一般的な指導案との違い

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

社会科は継続的に教えるのも学ぶのも苦手意識の高い教科であることが、あるアンケート結果から分かっている。社会科授業の苦手な教師には、「どのように何を教えて、何を考えさせたらよいのか」という手だてを得るための全体的な授業設計法が必要である。日常的には、授業の技能や指導法よりも授業構成を考える方が必要性は高い。しかし、苦手意識が高い教師は、とかく何となく授業を流してしまうことがある。

教師は、「教科書を教える授業」から「教えるために教科書を活用する授業」へと転換する方法や、児童の思考の流れに無理なくめあてに達成できる無駄のない授業設計の方法を求めて本を読もうと考えるが、次のような大きな壁にぶつかる。①本が大量にあり、自分に合う本を見付ける気にならない。②本の内容が難しい（難しそう）、③いわゆる「ハウツー本」もあるが、実態と合わなかったり、結局は教師の力量が必要だったりとうまくいかない。④長時間授業準備をする余裕がない。こうした壁は長い間あまり変化が見られず（④は最近）に、社会科がまるで「専科」のような専門性を必要とする教科のように思われ、教員から敬遠される教科となり得る。

指導の仕方を早急に手に入れるには、指導書がある。指導書は、書かれているめあて等の背景を知らなくても表面的・形式的に授業を流すことはできる。ただしこのように学習活動の目的を十分理解せずに授業をすると、指導書に書かれていない児童の反応に対応できなくなり、その影響は授業の流れを重視するあまりに強引な発問になる等の多くの課題を生む原因となる。

そこで本研究は、比較的短時間に授業設計や反省を自らの力で行えるものを提案し、教師の主体的な指導技術向上の態度が育成できることを目指した。

２　研究の内容・研究の方法

授業では、「この学習活動は何のためにあったのか」「この学習活動はなくてもまとめることができたのではないか」となることがある。原因は、学習活動の関連性の薄さにあり、それに気付きやすいのが「授業設計シート」(図１)である。

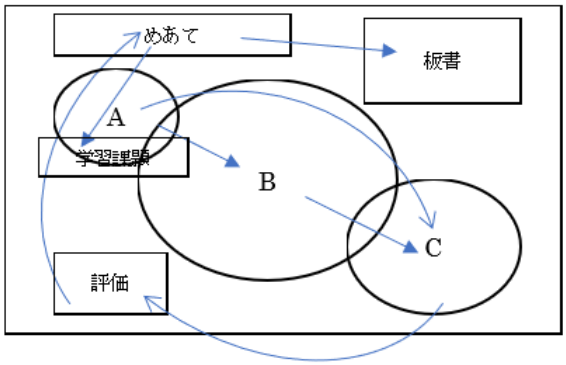

図１　「授業設計シート」

一般的な学習指導案では、縦軸に沿って時系列的に整理されている（図２）。また、児童の活動と指導上の留意点が左右に分けられている。これらは、順序立てて学習を進めることへの意識が強化されやすくなる。さらに、それぞれの学習場面でどのようなことをしたらよいかの方向性を「項目」で示し、メモ的な要素が強いため、それに合わせて設計すればある程度の授業となるので、一般的な学習指導案は日常的に活用しやすいことが特徴である。

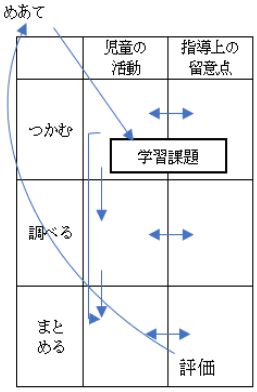

図２　一般的な指導案

それに対し「授業設計シート」は、一枚で授業に必要なこと全てが収まっているので、総合的に学習活動等の関連性を確認するのに適している。（図１）また、設計上で骨となる部分を指示したり必要な指導技術の一部を示したりはするが、「ハウツー本」のように「こう言えば児童はこう考える」というのでは、私が理想としている教師の指

導力向上とはならない。真似することは大切だが、失敗したとしても自分で考える努力をすることが授業力向上になるのは言うまでもない。「授業設計シート」はある程度の道筋を示すが、答えを出すのは授業者本人になる。当然、自分で考えること、つまり努力を要する部分が多すぎると分からないことが多くなるので、「授業設計シート」が支援につながらない。開発段階で、授業者の届く範囲の努力をさせる、そのバランスが非常に難しい。短期的な効果としては明日の授業設計の方向性が見えるツールであり、中・長期的には教師の授業力を引き上げるためのツールと位置付けている。

3　研究の結果

１回目（「授業設計シート」不使用）では、Ａ教諭の授業力分析を行った。逐語記録を取った結果、課題点は 45 点あり、「授業設計シート」による改善の可能性が高い部分が約 49%、発問等によい影響が期待できる部分が約 18%、「授業設計シート」による改善・影響が薄い部分が約 33%であった。つまり、この授業における約 67%の項目で「授業設計シート」で改善・影響が期待できると分析した。

２回目（「授業設計シート」不使用）では、「授業設計シート」の示した項目の正当性と効果を分析した。

３回目は「授業設計シート」を使用する練習と位置付けた。

４回目は本格的に本研究の効力分析を行った。逐語記録から抽出した課題を２回目と量的、質的に比較することで、①学習活動の関連性を意識して設計していること②考えるためには基礎知識が必要だと理解して設計していること③授業をよくするために資料を作り活用したという重要な３点が増えたと分かった。また、④児童の反応を意識して授業設計をしたことや⑤具体的なイメージをもって授業に臨んだ２点はＡ教諭の成長である。授業後の反省では、Ａ教諭の「授業設計シート」への書き込みから短時間で課題に気付いていることが分かり、本研究の有効性が証明された。

５回目は、関連性を意識した設計であることから具体的に分析し、かなり意識していることが分かった。また、逐語記録から私が出した課題点とＡ教諭の授業後の反省を比較して、「授業設計シート」の反省のしやすさについて分析した。特に、「全部出させるのではなく、めあてに向かうものを選んでいくべき」、「“深める”必要がないものを問い返していた」を反省できた点や、具体的な改善策を考えられたことが成果であった。

Ｃ教諭による「授業設計シート」の汎用性については、自分で工夫した授業を行うための基礎として有効であることを証明した。

4　研究の考察

「授業設計シート」は授業設計の方向性を示したものであり、全ての条件に当てはまる万能なものではない。そのため、学習内容に合わせてある程度授業者が修正しなければならないが、それこそが「授業設計シート」の目的である。つまり、明日の授業に使える即効性と長期的に見た授業力向上をバランスよく行えるということだ。

私の示した「授業設計シート」は、正解を示したものだったり方法論を示したものだったりするものではない。授業をある程度型にはめ、そのうえで工夫を促すのが「授業設計シート」である。そのため、利用したからと言って必ずしもうまくいくとは限らない。そこにはやはり教師の工夫と努力（「利用」から「活用」へと向かう能力）が必要である。

今回の分析に限定すれば「授業設計シート」は予定通りの成果は出た。一方で、「授業設計シート」も、結局のところ読まなければ使えない。誰もが読みたいと思わせる工夫も考えていたが、残念ながらそこまでは至らなかった。その点は、同様の課題が残っている。

5　今後の展望

今回作成した「授業設計シート」をＴ小学校研究発表授業検討会で使用した。結果、関連性を意識した授業となるだけでなく、検討会に参加した４名が授業全体のイメージを共有しやすい結果を得た。検討会終了後に行った学年の話合いでは、検討会の内容を振り返りやすかったという報告を受けた。

今後は、書籍のように教師全体に示して効果を期待するのではなく、こうして私が示しながら少しずつ活用できればよいと考えている。着実な指導力向上のためには、「授業設計シート」と「人」がセットで指導する必要がある。当然、書籍に比べて有効範囲は狭くなるが、根強く生きた指導となるように広めていきたい。